

スライド・パラノイア

1. キー・ウォーター ～トロンボーンとエレクトロニクスによる～ (2013) / 一ノ瀬 響 & 村田 厚生
2. タブラ・イスト ～トロンボーン・ソロのための～ (2008) / 村田 厚生
3. 超ラセンⅢ ～2本のトロンボーンのための～ (2007) / 福井 とも子
4. インナー・ミラー ～トロンボーンとエレクトロニクスによる～ (2013) / 一ノ瀬 響
5. スライド・パラノイア ～トロンボーン・ソロのための～(2011) / 村田 厚生
6. 遠日点・近日点 ～トロンボーンとエコー楽器のための～ (2010) / ヴァレリオ・サニカンドロ
7. コラルムⅣ ～4本のトロンボーンのための～ (2013) / 村田 厚生
8. 輪郭主義Ⅲ ～トロンボーンとピアノのための～ (2012) / 山本 裕之
9. 「中国の不思議な役人」よりアレグロ (1918-1924) / ベーラ・バルトーク
(トロンボーン12重奏アレンジ : 村田厚生)
10. 西新宿ブルース ～トロンボーン・ソロのための～(2010) / 小出 稚子

Slide Paranoia

1. Key Water for trombone and electronics (2013) / Kyo Ichinose & Kousei Murata
2. Tabla-ist for trombone solo (2008) / Kousei Murata
3. A spiral III for 2 trombones (2007) / Tomoko Fukui
4. Inner Mirror for trombone and electronics (2013) / Kyo Ichinose
5. Slide Paranoia for trombone solo (2011) / Kousei Murata
6. Apogeo / Ipogeo for trombone and echo-instrument (2010) / Valerio Sannicandro
7. Choral M for 4 trombones (2013) / Kousei Murata
8. Contour-ism III for trombone and piano (2012) / Hiroyuki Yamamoto
9. Allegro from the Wonderful Mandarin (1918-1924) / Béla Bartók
(arranged for 12 trombones by Kousei Murata)
10. West Shinjuku Blues for trombone solo (2010) / Noriko Koide

1. 一ノ瀬 響 & 村田 厚生 / キー・ウォーター ～トロンボーンとエレクトロニクスによる～ (2013)
水の排出は金管楽器の宿命である。「ウォーター・キーを使わせてくれ！」
このCDのオープニングキーとしての意味を持たせた。

2. 村田 厚生 / タブラ・イスト ～トロンボーン・ソロのための～ (2008)
口伝で奏法を伝えるインドの民俗楽器「タブラ」。そのシステムを踏襲して聞き手の期待感を特殊奏法によって解決していく。

3. 福井 とも子 / 超ラセンⅢ ～2本のトロンボーンのための～ (2007)
「螺旋」をテーマにした作品の第5弾。
これまでに、「螺旋」をテーマにした作品として、聴覚の錯覚を利用しようとしたものや、リズムの構造によって表現しようとしたものなどがある。トロンボーンという楽器を考えれば、単に螺旋形をイメージするような曲線を描くのは簡単なことのようにも思えるのだが、たとえばスライドを用いたグリッサンドで得られる音程というのは、弦楽器のように自在ではなく、「螺旋」の持つ無限のイメージを表すことは難しい。この作品では、螺旋を表現するための楽器の可能性について、演奏者とのコラボレーションにより可能となった、いくつかの種類のグリッサンドテクニックを用いながら、演奏法のみではなく、様々な表現による「螺旋」を提示していくことを試みた。

4. 一ノ瀬 響 / インナー・ミラー ～トロンボーンとエレクトロニクスによる～ (2013)
“気がつくと、あなたは球形の鏡の内側に浮かんでいた。
あなたが歌うと、鏡が、反射が答える。
そしてあなたは、あなた自身がその鏡でもあることに気がつくのだ。”

“Inner Mirror” は、村田厚生さんが吹くトロンボーンと塩ビ管による”疑似ディジュリドゥ”を多重録音した音源に、ライブで演奏可能なソロパートを重ねる形で構成されている。コンサートバージョンでは、音響の再現性を確かなものにするため、シンプルな音源再生+リアルタイムパフォーマンスにて上演することとした。

「わたし」と「わたしでないもの」の境界を探る旅。

5. 村田 厚生 / スライド・パラノイア ～トロンボーン・ソロのための～(2011)
トロンボーンの特徴である「スライド」に固執、文字通り偏執した作品である。固定されないピッチ、不安定なヴァイブラート、言語のエミュレートの3つの部分から成る。

6. ヴァレリオ・サニカンドロ / 遠日点・近日点 ～トロンボーンとエコー楽器のための～ (2010)
2001年に村田厚生氏によって委嘱され、最近任意の「共鳴楽器」を伴う新しいバージョンに改訂された。曲は3つのセクションから成る。異なる方向に進む音の動きをシミュレートする

APOGEO(遠日点)、次はトロンボーンとピアノが融合する TRANSITIO(通過点)、最後はトロンボーンが姿を消しピアノが低音の持続音を奏する IPOGEO(近日点)である
空間と距離というテーマを超えた劇的な雰囲気を持ち、独奏楽器と共鳴楽器(このバージョンではピアノ)との対話は複数のポリフォニーを構成し、たびたびその緊張感が狂気までに達する。

7. 村田 厚生 / コラールM ～4本のトロンボーンのための～
5度を平均律で5分割した音律によるコラール。周波数の算出では作曲家、松平 頼暁氏の絶大なるご協力をいただいた。
8. 山本 裕之 / 輪郭主義 III ～トロンボーンとピアノのための～ (2012)
ここ十数年来の私の作品では、「コア」と定義づけられた音に、そのコアを曖昧にしてゆく様々な要素ーピッチ、リズムなどーが絡み合うという作曲手法が採られているが、《輪郭主義》シリーズでは、いわゆる十二平均律の楽器と4分音の楽器が衝突することによってそれが実現されている。同時に、4分音の衝突が招く音響的な歪み自体も、私自身にとっては魅力的な現象である。《輪郭主義 III》はピアノとトロンボーンによって演奏されるが、4分音に加えてトロンボーンの声に伴う重音や、時折現れる舞曲的なリズム等によってもこの曲の性格が特徴付けられている。
9. ベラ・バルトーク / 「中国の不思議な役人」よりアレグロ (1918-1924)
トロンボーンが活躍するオーケストラ曲の12重奏版アレンジ。オーケストラで活躍するトロンボーン奏者へのオマージュである。
10. 小出 稚子 / 西新宿ブルース ～トロンボーン・ソロのための～(2010)
煮詰まった闇鍋の底のような雰囲気を醸し出す、夜の新宿駅西口界限。この独特の空気をうつしとるならば、ブルース。といっても初期のもの。日常の憂鬱なことなどを即興的に歌っていた、実際聴いてみると酔っぱらいの唸り声にしか聴こえないあのブルース。2008年新大久保での初演から、度重なる再演を経てさらに味をしみ込ませ、今宵もトロンボーン1本で素朴に歌います。聴いてください、西新宿ブルース。